

「研修会等名称」

2012年度 第17回FDフォーラム

場所： 京都産業大
期間： 3月3～4日

1. 研修の内容

フォーラムテーマ；

「大学におけるキャリア教育を考える

— 企業が求める人材って、大学で育成しないとだめ？ —」

第一日目；

○シンポジウム

テーマ 「企業が求める人材って、大学で育成しないとだめ？」

シンポジスト

- ・法政大学キャリアデザイン学部教授
- ・京都産業大順教授
- ・(株)資生堂人事部キャリアデザインセンター長
- ・(株)ベネッセコーポ大学事業部課長

○ 情報交換会

(株)資生堂人事部キャリアデザインセンター長との名刺交換と
質疑歓談

第2日目

分科会 第三分科会

テーマ 「教養教育における科学リテラシー

— 問題発見力と問題解決力の習得を目指して—」

- ・ 神戸大名誉教授
- ・ 京都大教育学研究科教授
- ・ 法政大学生センター課員

2. 研修の成果

○第一日目のシンポジウムでは、教育現場と企業社会との間にある「教養」の内実についての認識の乖離状況を再確認できた。

○第2日目の分科会では、現代社会に求められている「教養」の内実のありかと指導方法等の問題点や課題が明らかとなった。

総称として「キャリア教育」と仮に呼んでおける諸々のテーマ分野は、従来、「教養」と呼ばれていたものとはほぼ一致する。大学に対するこれらの分野教育の需要・要望は、企業からも、したがって、同時に学生と親（社会一般）からも、ますます強まっている。一方、「キャリア教育は、大学でしなければダメ？」という本シンポジウムの副標題のとおり、大学現場からの本音として、いわゆる近年「キャリア教育」として括られるようなテーマ・分野である「教養」教育は、大学では「できない」、あるいは、できるけれども「したくない・すべきでない」、という実態が報告された。

しかし、多くの大学では、この「キャリア教育」と総称し得る各教科分野の導入に真剣にかつ喫緊課題として取り組んでいる（取り組まざるを得ない状況にある）ものの、その導入の仕方の多くは、「初年次教育」もしくは「基礎教育」、という位置づけに留まっている。いわば専門への「予備的段階・準備」という位置づけにおいて行われている。

このため残念ながら、カリキュラム実践上の位置づけが「補足的」・「下位」的な位置づけ・「個々の現場経験則まかせ」などに留まっていることから、教育効果を上げられずに形骸化し失敗に終わっている場合も多い。

その背景には、現今の学生にとって、こうしたテーマ・分野が、「予備的段階・準備」段階で習得可能な学習内容ではなく、むしろ「本題」となっていることが指摘される。学生には、本気で取り組む課題として立ちほだかる山。企業や社会には、登山練習のための丘。そして、最大の問題は、大学人さえもが、これを山ではなく丘としか認識していないことにある、とする。

関連して、近年の傾向としては、「専門は大学院で」とされつつあり、特に従来の学部での専門教育は修士課程を中心に施すのが今後の方向性と考えられている。ただし、この傾向は研究者養成も強く期待される上位校には当てはまらない。同時に学部教育については、「キャリア教育」（即ち従来の「教養」教育）の観点からは、あらゆる学部教育は一般社会人として活躍するに際しての強化分野、比較における「強み」を修めることにある、という程度の位置づけが適当なものになりつつある。たとえば、語学や交渉スキルを強化した学生、マネジメント理論を強化した学生、リーガルマインドを強化した学生、金銭の流れについての知見を強化した学生、などというように。近年の「学士力」も、この「強み」程度の実質を指す。

3. 授業への研修成果の反映状況

いわゆるジェネリックスキルとして現代社会に求められていることからの指導が、もはや一般教育課程による指導では不可能に近い学生状況を想定した場合、ジェネリックスキルを専門教育として施すことが必要となる。その際の具体的なアプローチやシラバスデザインを構築するためのヒントを得たので、まずは、母語文法の体系的学習による〈物事の全体像を把握するコンピタンス〉の涵養、論理作文の学習による〈説得構造を形成するコンピタンス〉の涵養、の二点について、これまでの教育研究成果をさらに充実させ成果をあげたい。それにより、やはり教養的と認識されがちなこれら分野を、より専門的な分野として教育研究を施せるアプローチを早急に具体化させ創成にこぎつけたい。

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係